

女子ソフト 一人歩んだ

平成
@北関東

8

2020年東京五輪で、3大会ぶりに復活するソフトボール。女子日本代表を率いるのは、群馬県高崎市を拠点にプレーし、指導してきた宇津木麗華さん(55)だ。その麗華さんが「あの人がいなかったら、今の女子ソフトボールはない」と尊敬する宇津木妙子さん(65)。2人は平成時代、女性の活躍の場を広げ、マイナー競技だったソフトボールに光を当ててきた。

「何でお前なんだ」。妙子さんが1986年、当時3部リーグの日立高崎の監督に就任した時、風当たりは強かった。女性の競技でも男性の指導者ばかりの昭和時代。実業団で13年活躍し、その経験を買われた妙子さんでさえ異端視された。「勝って結果を残し、女や男は関係なく人とし

五輪へ普及度アップ 師弟の夢

て立派な姿を見せよう」。妙子さんはそう決意した。

中国・北京出身の麗華さんは、そんなころに妙子さんに誘われて来日し、チームに加わった。中国でのジュニア時代、訪中した妙子さんのプレーに憧れ、その後も国際大会で妙子さんに教えを請うなどして交流。やがて中国代表となり、「アジアの大砲」と呼ばれるようになっていた。

チームは89(平成元)年に1部に昇格。その年の全日本総合選手権で優勝した。90年にはリーグを制し、妙子さんは女性初の日本代表監督に。その一方、日常の家事も手を抜かず、夫への食事を作る際に包丁で足をけがをしてもノ

ックを打ち続けた。活躍はねたみを招く。代表監督就任からしばらくして、身に覚えのない怪文書が出回った。周囲の選手らが「こんなことで辞めたらだめだ」と妙子さんを支えた。

麗華さんは妙子さんの下で大黒柱であり続けた。95年に帰化すると、師の名字を名乗らせてもらった。

妙子さんの苦労は報われる。00年のシドニー五輪では予選から全勝で決勝に進出。決勝は米国に1-2で敗れたが、大接戦を演じた。この活躍に人々は沸き、帰国時の成田空港では前を行くプロ野球

選手たちより大きな歓声に迎えられた。「あの時は本当に感動した」と妙子さん。

04年アテネ五輪では麗華さんが主将を務め、銅メダル。妙子さんはチームの監督を02年に退き、代表監督も五輪後に退任したが、妙子さんが開いた道は続いた。2人がチームで指導してきた上野由岐子投手らが活躍し、08年北京では悲願の金を獲得した。

もはや多くのチームで女性監督に就くのは珍しくなくなっていた。麗華さんも03、16年にチームの監督、11年からは代表監督を2度務める。

ただ、順風満帆ではなかった。北京の栄光から一転、12年ロンドン、16年リオデジャネイロと2大会連続でソフトボールは五輪競技から外された。

チームでも苦しんだ。実業団は本業の業績に左右されやすい。高崎市のチームの歴代

の親会社は日立、ルネサスエレクトロニクスといった半導体産業。平成以降、業績悪化で大規模なリストラや工場閉鎖が相次ぎ、給料のカットなども経験した。

そんなピンチに地元との結びつきを強めたのが、15年の新チーム創設だった。その数年前、当時の親会社のルネサスからチームの存続が厳しいと告げられた妙子さんは、麗華さんと2人で親会社探しに奔走。「この強いチームをバラバラにしてはいけない」。手をさしのべてくれたのが、チームの地元高崎で創業したビックカメラ(東京)や高崎市だった。リーグ優勝11回、全日本総合選手権優勝17回の屈指の強豪は、今も健在だ。

代表選手も育て続けている。迎える東京五輪。五輪の成績に応じてスポットライトを浴び、五輪から外れると世間から忘れられる。そんな日々を味わったからこそ、代表監督として麗華さんが懸ける思いは強い。「どうしても金メダルを取りたい」

妙子さんは今、欧州やアフリカなど、国内外で競技の普及活動に努める。五輪競技から外されたのは、世界的な普及度不足などが理由だったからだ。「夢の舞台の五輪でソフトボールが続くよう、世界中の人たちに素晴らしさを知ってほしい」

(丹野宗文)



シドニー五輪決勝後、宇津木妙子監督(左)と記念写真に納まる宇津木麗華選手。当時37歳ながら大会で計3本塁打を放ち、代表の主力として活躍したNPO法人「ソフトボール・ドリーム」提供。宇津木妙子さん